【352】

氏　名（本籍）	大矢俊明（宮城県）
学位の種類	博　士（言語学）
学位記番号	博　乙　第　2239　号
学位授与年月日	平成18年10月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**ドイツ語再帰構文の対照言語学的研究**

主　査	筑波大学教授	博士（ドイツ文学）	伊藤　眞
副　査	筑波大学教授	博士（言語学）	加賀信広
副　査	筑波大学教授	文学博士	廣瀬幸生
副　査	筑波大学助教授	Ph. D.（言語学）	森　芳樹
副　査	筑波大学教授	博士（言語学）	鷲尾龍一

論文の内容の要旨

本論文は，ドイツ語と英語およびオランダ語の再帰構文を対照言語学的立場から比較検討し，ドイツ語再帰構文の特性を明らかにするとともに，再帰構文に関するより一般性の高い議論を展開している。本論文の構成は以下のとおりである。

第1章　序論
第2章　強形再帰代名詞と弱形再帰代名詞
第3章　身体をめぐる再帰構文Ⅰ　～結果構文～
第4章　身体をめぐる再帰構文Ⅱ　～移動様態動詞～
第5章　外項抑制を伴う再帰構文Ⅰ　～反使役化～
第6章　外項抑制を伴う再帰構文Ⅱ　～中間構文～
第7章　再帰的心理動詞
第8章　再帰代名詞の類型
第9章　結論

第1章は，序論として次章以下の問題提起がなされている。

第2章では，強形再帰代名詞と弱形再帰代名詞とが区別され，両者の違いは，当該の文が外向的（extroverted）状況あるいは内向的（introverted）状況のどちらを示しているかによるとされている。著者は外向的と内向的という対立は，比較構文や動名詞の解釈，ドイツ語における非人称受動文の解釈にも有効であると主張する。英語の再帰代名詞 oneself は基本的には強形再帰代名詞であるが，身体に対する行為の場合にはゼロ形の弱形再帰代名詞を想定できる。オランダ語では強形再帰代名詞 zichzelf と弱形再帰代名詞 zich を形態的に区別するが，ドイツ語では強形再帰代名詞と弱形再帰代名詞とが形態的には区別されないことを指摘している。

第3章は，英語における She danced free of her captors. のような結果構文に再帰代名詞が生起しない

理由を考察している。非能格動詞が用いられているにもかかわらず，この結果構文に再帰代名詞が生起しないのは，英語の再帰代名詞 oneself は，主語の身体領域に生じる出来事を表す場合には生起しなくてもよいという性質に起因すると著者は主張する。更に，ドイツ語の再帰代名詞には，他者へ向かうことなく主語の身体的領域内で生じる出来事と整合性が存在し，また，オランダ語の弱形再帰代名詞と異なり，身体が比較的強い影響を被るという条件がないので，liegen‘lie’や stehen‘stand’のような状態動詞から形成される結果構文にも再帰代名詞が生起できるとする。

第 4 章では，いわゆる移動様態動詞について，これらの動詞を，使役の意味を含む再帰動詞とみなす先行研究を批判し，著者は，これらの動詞を行為性という意味を含む移動動詞と分析している。また，英語にみられる勧誘行為交替を自動詞の使役化により生ずるものとみなしている。

第 5 章では，まず，起動的事態を表す再帰動詞と自動詞を比較分析している。フランス語における主張とは異なり，ドイツ語では自動詞と再帰動詞の使い分けを見出すのは困難である。また，オランダ語の弱形再帰代名詞は外項抑制という操作とは馴染まず，そのことから，弱形再帰代名詞の分布は，身体に対する行為から反使役化に至るまで含意関係にあることを明らかにしている。すなわち，外項抑制に伴い弱形再帰代名詞が生起する言語であれば，「自分の身体を洗う」という出来事を表す際にも弱形再帰代名詞が用いられ，また「座る」を再帰動詞により表現しない言語は，外項抑制に伴い生起する弱形再帰代名詞も持たないという関係が認められる。

第 6 章では，外項抑制を伴う中間構文について，英語とオランダ語では，いわゆる二重目的語を持つ動詞から中間構文を形成できず，一方，ドイツ語では与格と対格を選択する動詞から中間構文を形成できる理由を検討している。この違いは，間接目的語ないし与格を導入する主要部を認可するシステムの相違に起因する。すなわち，英語とオランダ語においては，間接目的語を導入する主要部は，動作主が統語的に存在する場合にのみ認可されるが，ドイツ語では，与格という形態そのものにより間接目的語が認可されると主張している。

第 7 章では，ドイツ語における，いわゆる再帰的心理動詞は受動化が可能であるため，これらの再帰動詞を，対応する他動詞から反使役化により派生させる従来の分析は妥当ではないことを示し，再帰的心理動詞 sich freuen と使役の意味を持つ他動詞 freuen は派生関係にはなく，これらの動詞は互いに独立して存在すると主張している。

第 8 章では，弱形再帰代名詞の生起が外項抑制をもたらすという見解を批判し，外項抑制は弱形再帰代名詞の生起とは関係なく，独立して存在すると主張する。また，外項抑制に伴い生起する弱形再帰代名詞を，目的語が主語位置に移動する際の痕跡の音声的実現であると分析している。更に，本論での分析をふまえ，再帰代名詞自体が意味役割を持つか否か，再帰代名詞が意味役割を持たない場合，再帰代名詞を含む連鎖には外項と内項どちらの意味役割が付与されるかというふたつの観点から，ドイツ語の再帰代名詞を，1）意味役割を持ち外向的な状況を表す動詞と共起する強形再帰代名詞，2）意味役割を持ち内向的な状況を表す動詞と共起する弱形再帰代名詞，3）意味役割を持たないが先行詞となる主語に外項の意味役割が付与されている弱形再帰代名詞，4）外項抑制に伴い生起する弱形再帰代名詞の 4 タイプに分類している。英語の再帰代名詞はおもに 1）のタイプであり，オランダ語の弱形再帰代名詞は 2）と 3）のタイプである。さらに 4）のタイプにより，オランダ語と異なり，ドイツ語には多くの内在的再帰動詞が存在することが説明されるとしている。

第 9 章では本論文における主張点がまとめられている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，ドイツ語における再帰構文の用法および特性を，英語およびオランダ語と比較対照しつつ詳細に考察している。再帰構文については，近年さまざまなアプローチならびに主張がなされているが，本論文では，ドイツ語のみならず英語やオランダ語も分析対象とし，より一般性の高い議論を展開している。また，本論文の当該研究分野における貢献としては，次の点があげられる。

1）ドイツ語特有の再帰動詞から形成される非人称受動文を用いて，従来の主張とは異なり，いくつかのタイプの再帰動詞がいわゆる非能格性を有する点を明らかにした。これは，例えばEr ärgert sich. ‘He is angry’のような心理動詞に当てはまる。ロマンス系言語を扱った研究では，このような再帰的心理動詞は，対応する他動詞から派生されると一般に考えられているが，ドイツ語における再帰的心理動詞が受動可能であることを指摘した意義は少なくない。
2）弱形再帰代名詞が生起することにより外項の統語的連結が阻まれるというSteinbach（2002）他の主張は不適切であることを実証し，あわせて弱形再帰代名詞には意味役割を持つものから持たないものまで連続していることを示した。これにより弱形再帰代名詞の生起と外項抑制は独立しており，更に英語やオランダ語において外項抑制が生じている文に「ゼロ形」弱形再帰代名詞を仮定することは適切ではないことを指摘した点は評価できる。
3）ドイツ語の弱形再帰代名詞sichと異なり，オランダ語の弱形再帰代名詞zichは外項抑制と整合性がない点を実証し，そのことがドイツ語とオランダ語にみられるいわゆる内在的再帰動詞の相違に反映されていることを指摘した。これまで内在的再帰動詞については，単に歴史的な名残として議論の対象とされることは少なかったが，ドイツ語における内在的再帰動詞を項構造の上から二種類に区別できると明確に指摘した点は興味深い。

このように本論文はドイツ語に関する事実観察から出発し，個別言語を超えた幅広い議論を展開していることは評価できるが，その一方で，個々の分析については以下のような問題点が指摘される。

1）本論文では中間構文などの外項抑制を含む構文に生起する弱形再帰代名詞を，目的語が主語位置に移動する際の痕跡の音声的実現であるという新しい分析が提案されているが，ドイツ語ではEs schläft sich gut in diesem Bett. ‘In this bed you can sleep well.’のように自動詞からも中間構文を形成することが可能である。この文の再帰代名詞も同様に分析できるのかについては不明であり，より詳細な検討が必要である。また，どのレベルで「目的語が主語位置に移動する」のかについても理論的考察が求められる。
2）英語の結果構文She danced free of her captors. において，再帰代名詞が生起しないのは英語の再帰代名詞の特性に基づくと分析されており，その背景には，このタイプの結果構文における身体の影響度が“He washed.”における身体の影響度と同じであるという主張が存在する。しかし本論文では，この主張に対し必ずしも十分な論拠が示されておらず，より説得力のある説明が求められる。

とはいえ，本論文では，従来とは異なる新たな視点から，ドイツ語の再帰構文が，多くの実例をもとに実証的かつ詳細に分析され，再帰構文についての新たな知見が提示されており，再帰構文研究に対する貢献は大きく，学位論文として十分な水準に達していると判断される。

よって，著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。